

瀬戸内海から初記録のミヤコテングハギ

横川浩治・安部亨利

ミヤコテングハギ *Naso lituratus* (Schneider) はニザダイ科テングハギ属の中型種で、熱帯～亜熱帯のサンゴ礁域で普通にみられ、特にダイバーにはなじみの深い魚である。今回、このミヤコテングハギが瀬戸内海から採集され、稲葉(1963 & 1988)や清水(1997)には収録されていないことから、同水域からの初記録になると思われるので報告する。

記載にあたって、計測、計数方法については Hubbs and Lagler (1970) およびその解釈(清水, 1995)に全面的に従った。一般に計測形質の多くは標準体長に対する割合で表わされるが、本種の場合、尾柄部の両側に2対の堅固な骨板を備えるため、外部から尾骨末端の位置を推定することが難しく、標準体長の計測は困難である。そこで標本を軟X線撮影し、尾骨末端の位置を特定して標準体長の計測を行なった。同様に、脊椎骨の計数も軟X線写真により、腹椎骨と尾椎骨に分けて計数した。鰓耙は上枝と下枝に分けて計数し、鰓弓のちょうど屈曲部に位置する鰓耙は下枝の鰓耙数に含めた。

本論に入るに先立ち、今回得られたミヤコテングハギを公式標本として登録された徳島県立博物館の佐藤陽一博士にお礼を申し上げる。

ミヤコテングハギ

Naso lituratus (Schneider, 1801)
(Fig. 1)

材 料

1996年8月10日、香川県三豊郡仁尾町地先の燧灘(瀬戸内海のほぼ中央部)で小型定置網に入網した1個体。全長394.0mm、尾叉長286.0mm、標準体長269.6mm、体重537.6gであった。標本は徳島県立博物館にTKPM-P 5557として登録、保管されている。

記 載

背鰭6棘29軟条、臀鰭2棘28軟条、胸鰭17軟条、腹鰭1棘3軟条、鰓耙数4+12=16、脊椎骨数8+13=21。

全長は標準体長の146.1%、尾叉長は106.1%、前肛門長は34.5%、体高

は41.7%、体幅は14.3%、尾柄高は5.2%、尾柄長は7.2%、前背鰭長は29.8%、背鰭最長棘長は11.5%、背鰭最長軟条長は9.6%、臀鰭最長棘長は6.9%、臀鰭最長軟条長は6.8%、胸鰭長は16.8%、腹鰭長は13.5%、頭長は24.9%。

吻長は頭長の77.0%、眼径は20.8%、両眼間隔は31.3%、眼下幅は72.4%、上顎長は23.6%、下顎長は21.3%。

体は楕円形で、非常に側扁する。尾柄部は著しく細い。皮膚は厚く、全身が細かい鱗で覆われる。側線はないが、後頭部から尾柄部にかけて側線状のくぼみが弧状に走る。尾柄部の体側には、2対の円形の堅固な骨板を備え、骨板上にはそれぞれ1本の強大で不動の前向棘がある。

背鰭および臀鰭の基底は非常に長く、腹鰭は胸位である。尾鰭の上、下縁の軟条は糸状に著しく伸長し、これらの糸状軟条を除けば尾鰭後縁は截形を呈する。背鰭、臀鰭および腹鰭の棘は強く、特にそれぞれの第1棘は強大である。眼は小さくほぼ完全な円形で、その直前部は瘤状に隆起する。眼が頭部の著しく後方に位置するために吻は非常に長い。口は小さく、上顎は下顎よりもやや前に突出する。両顎には短い切歯状歯が1列に並ぶ。

鮮時の体色は、全体が茶色味を帯びた黒色で、前鰓蓋骨の後縁は白く縁取られ、眼の前縁下から口角部にかけて前方に弧状を呈する淡橙色の線がある。尾柄部の2対の骨板は鮮やかな橙色で、その周囲も同様の色彩で縁取られる。臀鰭の縁辺側およそ3分の2、腹鰭、および口唇も同様の鮮やかな橙色である。背鰭は棘条部後半から最後部にかけての縁辺側およそ3分の1は白い。糸状軟条を除く尾鰭の後縁は淡橙色に縁取られる。胸鰭の後部は淡橙色。固定標本では、地色の黒色はほとんど変化しないが、橙色や淡橙色の色彩はすべて淡色になる。

生息状況

瀬戸内海における生息状況は不明。本種は本来熱帯～亜熱帯域に分布する典型的な暖海性種であり(荒賀, 1981; 岩見, 1986)、冬季の水温が7℃台まで低下する瀬戸内海に常在種として生息しているとは考えにくい。さらに、本報告の冒頭で述べたように、これまで瀬戸内海からの記録がなかったことからしても、今回の個体は何らかの原因により本来の生息域から瀬戸内海に迷い込んだ過来種とみるのが自然ではないかと思われる。

分 布

本種は西部太平洋の熱帯～亜熱帯海域、インド洋、紅海、アフリカ東岸にかけて広く分布する(荒賀, 1981; 岩見, 1986)。日本における分布は、本州中部以南(岩見, 1986)、駿河湾以南(荒賀, 1985)、鹿児島県以南(荒賀, 1981)などとされ、吉野(1995)では本種の幼魚は伊豆周辺でもみられるが、成魚はそれよりも南か奄美諸島以南に生息するとしている。

これらの知見から、南日本に出現するものは、黒潮によって卵稚仔あるいは幼稚魚の時に南方から輸送されて漂着し、ある程度生育したものと推定され、通常は成魚まで成長する前に死滅するものと考えられる。今回得られた標本は後述のように完全な成魚であり、本種の成魚が南日本から報告されるのはかなり珍しい事例と思われる。

備 考

本種は前頭部に角状突起がなく且つ膨出もしないこと、およびその独特な体の色彩から同属他種からの識別は容易である。

今回得られた個体は尾鰭の上、下縁の先端が糸状に長く伸長し、また尾柄部の骨板と棘が非常によく発達していることから(Fig. 1)、完全な成魚であると思われる。

本種は典型的な藻食性であり、ホンダワラなどの褐藻類を主食とし(Debelius, 1993)、生息場所も餌の状況に左右される(岩見, 1986)。浅海の転石帯

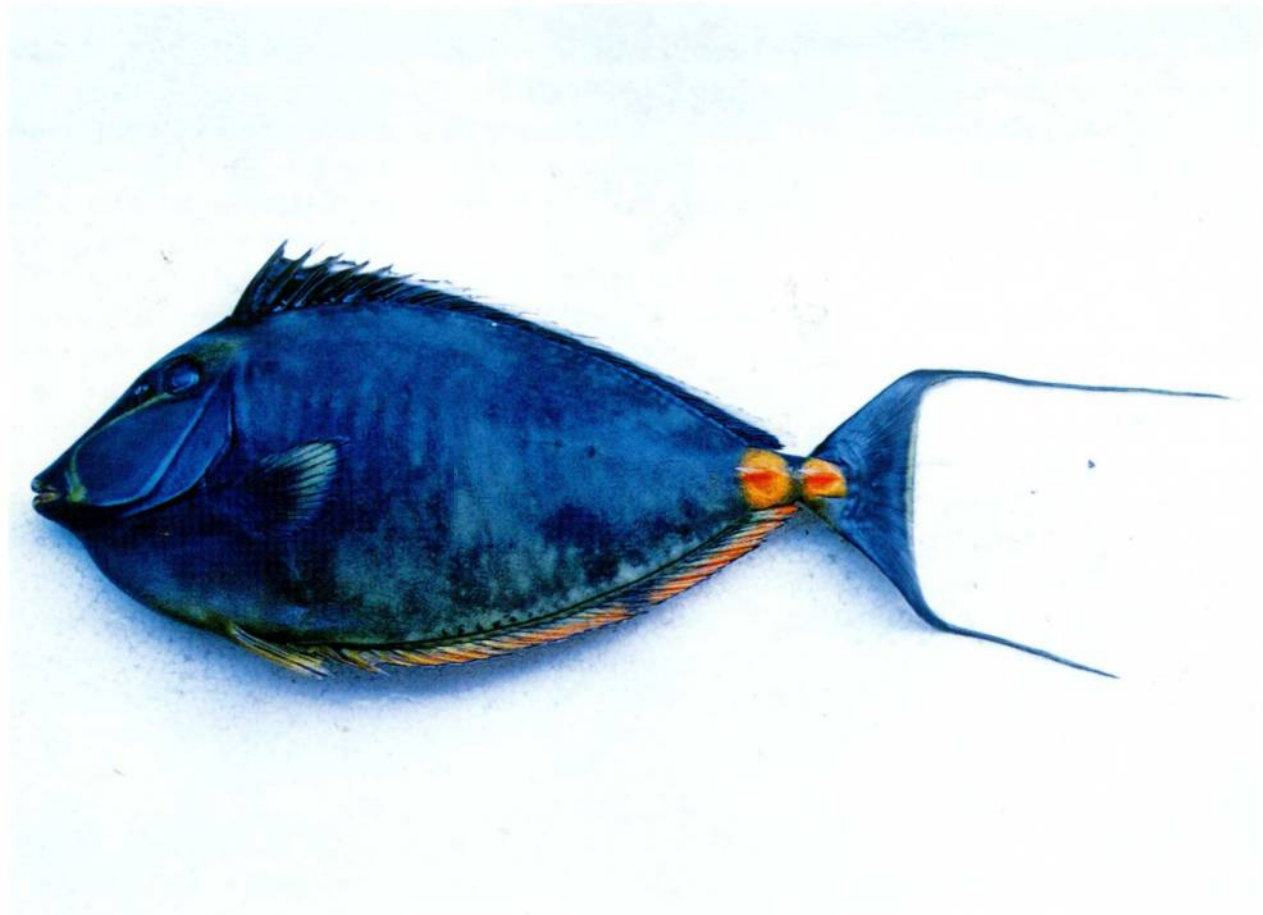


Fig. 1. 瀬戸内から得られたミヤコテングハギ. *Naso lituratus* obtained from the Seto Inland Sea. TKPM-P 5557, 394.0 mm TL, 269.6 mm SL.

や潮通しのよいリーフで単独あるいは小集団で行動し、ブダイ類などの藻食魚類とともにしばしば行動する(Kuiter & Debelius, 1994)。生息水深は普通水深1~50mくらいまでであるが、水深90mからの報告もある(Kuiter & Debelius, 1994)。

本種は肉質中に上質の脂肪分を多く含み、食用魚として非常に美味であるが(著者のひとり横川の経験)、その食物連鎖からフィジーやタヒチではシガテラ毒が蓄積することがあり(岩見, 1986)、地域によっては食用とする場合に注意が必要である。

引用文献

- 荒賀忠一, 1981. ミヤコテング. 落合 明監修. 学研生物図鑑, 魚類. 学研研究社, 東京, p. 271.
荒賀忠一, 1985. ミヤコテングハギ. 小西和人編. さかな大図鑑. 週刊釣りサンデー, 大阪, p. 299.
Debelius, H. 1993. Indian Ocean: Tropical fish guide. IKAN-Unterwasserarchiv, Frankfurt, 321 pp.
稲葉明彦, 1963. 瀬戸内海の生物相. 向島臨海実

- 験所, 広島, 352 pp., 6 pls.
稲葉明彦, 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相II. 向島臨海実験所, 広島, 475 pp.
岩見哲夫, 1986. ミヤコテングハギ. 阿部宗明編・監修. 生物大図鑑, 魚類. 世界文化社, 東京, p. 293.
Hubbs, C. L. & K. F. Lagler. 1970. Fishes of the Great Lakes Region. 3rd ed. Univ. Michigan Press, Ann Arbor, xv + 213 pp., 44 pls.
Kuiter, R. H. & H. Debelius. 1994. Southeast Asia: Tropical fish guide. IKAN-Unterwasserarchiv, Frankfurt, 321 pp.
清水孝昭, 1997. 瀬戸内海産魚類目録. 池原宏二編. 瀬戸内海のさかな. 瀬戸内海水産開発協議会, 神戸, pp. 87-94.
清水 長, 1995. 魚類の計測方法と用語の共通性について. 魚雑, 42(1): 98-102.
吉野雄輔, 1995. タイパーのための海中観察図鑑. PHP研究所, 東京, 167 pp.

(よこがわこうじ・あべゆきとし: 香川県水産試験場)

Abstract

First record of an unicornfish *Naso lituratus* from the Seto Inland Sea, Japan

Kōji Yokogawa & Yukitoshi Abe
(Kagawa Prefectural Fisheries Experi-

mental Station, 75-5 Yashimahigashimachi, Takamatsu, Kagawa 761-01, Japan)

An unicornfish *Naso lituratus*, Acanthuridae, which is known as a typical tropical species was first recorded from the Seto Inland Sea. One individual of *N. lituratus* was caught by fixed shore net at the Hiuchi Sea, located in central part of the Seto Inland Sea in summer of 1996. The individual was regarded as an adult because of its much elongated upper and lower rays of the caudal fin and well developed bony plates with keel-like spines on each side of the caudal peduncle. Although this species is distributed to southern coastal waters of the Japanese main islands, the fishes appearing around there are usually young. Therefore, the occurrence of the adult individual in the Japanese main islands is very rare case.